

トラベル×ロマンス

プロローグ

『清花も大きくなったら、お父さんみたいな素敵な旦那さまを見つけるのよ』

あれはまだ母が病氣と闘っていたころ。毎日、病室を訪ねてはベッドに貼りつくように過ごしていたわたしに、そうやって話してくれたことがあった。

『おとうさんみたいなの？』

『そうよ。お父さんみたいに、優しくて、誠実で、頼りがいのある素敵な旦那さまをね。清花もお父さんのこと好きでしょう』

『うん、だーいすき！』

厳しいときや怖いときもあったけれど、それでも仕事で忙しい合間を縫い、わたしや母と接する時間を作ってくれる父が好きだった。

母もそんな父を深く信頼し、尊敬しているのが伝わってくる。お父さんとお母さん。二人はとも仲が良く、わたしにとって自慢の両親。

横たわった母の顔色はあまり良くなかったけれど、こちらを見つめる瞳は生気に溢れ、きらきらと光っていた。その瞳をほんの少し細めて母が言う。

『お母さんね、結婚っていうのは、生涯——生きている間ってことよ、その生涯でただ一人、この人だけを愛していきますっていう誓いだと思うの』

『ちかい？』

『そう。清花が生まれる前、お母さんは「お父さんだけを愛します」って誓ったの。その気持ちは今でも変わらないわ』

『おとうさんだけ？ おかあさん、すずかのことはあいしてくれないの？』

言わんとするところを十分に理解できなくて、ちぐはぐな受け答えをしてしまったわたし。母は噴き出しながら、そんな娘の頭を撫でた。

『ふふ、何言ってるのよ。愛しているに決まってるでしょ、大切な一人娘なんだから。……うーん、清花にはまだ難しい話だったかしらね。とにかく、あなたが本当に愛しいと思う相手と結ばれてほしいってこと。それがあなたの幸せだと思うから』

ひとりごとみたいに言ったあと、髪を滑っていた指先が止まる。

『お母さんはきつと、清花が大きくなるまで傍にいてあげられないと思うの。お母さんの分までお父さんのこと、大事にしてあげてね。約束よ』

『うん』

母はそう言って、その手を指きりの形に変える。青い血管が透けて見える白くて細い小指に、自分の短いそれを絡めた。やくそく。

『……でも、どうして？ 「おかあさんはもうすぐよくなる」って、おとうさん、いったたよ。そ

したらおうちにもかえってこれるし、いっしょにおでかけもしてくれるって』

『そう……そうね』

母は結んだ指を解いて頷くと、複雑な表情で笑ってみせた。そのあと。

『ごめんね、清花』

ぼつり。そう寂しげに呟いた。

今から思えば、幼いわたしに真実を悟らせまいと氣遣ってくれたんだろう。

数ヶ月後、母は予言通りにこの世を去った。葬儀のあと、父は大泣きするわたしをしつかりと抱きしめてくれながらこう言った。

『清花。これからはお父さんと二人で頑張っていこうな』

それまで気丈に振る舞っていた父の身体が、小刻みに震えている。いつも落ち着き払っている父が初めて見せた弱み。母の言葉が思い出される。

『結婚っていうのは、生涯——生きている間ってことよ、その生涯でただ一人、この人だけを愛していきますっていう誓いだと思うの』

……ああ、そっか。

わたしにとっても大切なお母さんだったけど、お父さんにとっては生涯ただ一人、この人だけを愛すると誓ったパートナー。お父さんは今、その最愛の人を亡くしてしまったんだ。

だからお父さんの胸に顔を埋めながら決めた。

わたし、もったいい子になる。それで、亡くなったお母さんの分までお父さんを大事にしよう。

それがお母さんとわたしが交わした約束なんだから。

それからはや十数年。ハタチを過ぎて大人の仲間入りをしたわたしは、時折、母との会話を反芻する。

『清花も大きくなったら、お父さんみたいな素敵な旦那さまを見つけるのよ』

記憶に強く残っているのはあの病室でのお喋り。

二人の関係には今でも懂れている。

わたしも、母にとつての父のような——生涯を通して愛し続けたいと思える男性と結ばれたい。なのはどうしてでしょう、お母さん？

お母さんの言う「素敵な旦那さま」は、一向に姿を現す気配を見せません。

それどころか、男の子とは全く縁がないままハタチになってしまいました。結婚を意識するどころか、誰かとお付き合いらしたことがありません。

親友の明音には「ヤラハタとかちよーヤバくない？」と言われる始末です。ちなみに「ヤラハタ」というのは「やらずにハタチ」、つまり処女のままハタチを迎えることだと教えてもらいました。

最近はこのままじゃいけない、これじゃ永遠に男の子と触れ合わずに歳を重ねていくのでは……と、危機感を持つようになりました。

ただ出合いを待つだけでは、「素敵な旦那さま」はやつてこないということなのでしょう。だから、これからは待つだけではなく、わたし自身が「この人となら一生を誓える！」つ

て相手を見つける努力をしていかなければ。

と、前向きに考え方を改めた矢先だった——父からとんでもない宣告を受けたのは。

大学のテスト勉強もそっちのけで、悩んで、悩んで、悩んで。

ようやく一つの結論を導き出した。

大好きなお父さん。そして天国のお母さん。親不孝をお許し下さい。

わたし、篠宮清花は、生まれて初めて——家出をさせて頂きます！

1

「わたし、家出しようと思ってる」

決意のこもった一言を放つと、それまで長テーブルの向かい側に座り緩慢な仕草でスプーンを口元に運んでいた大河内明音が、ピタッとその手を止めた。

「……は？」

楕円を描くスプーンの上でミニチュアなカレーライスを作ったような一口を、今まさに迎え入れようとしたまま。歯科検診のときみたいな口の形で。

「だから、わたし、家出する」

「イヤイヤイヤ、え、ちよつと待つて」

いつも気だるそうにしている彼女が、珍しく慌てている。早口でそう言うのと同時、周囲を気にするみたいにきよきよと目を動かしした。

前期の試験日程が終了したお昼休み、学生食堂の賑わいはピークを迎えているところだ。あちらこちらから聞こえてくるお喋りや笑い声にわたしの発言が上手くカバーされたと知り安堵したのだから明音は、

「――清花、あんた急に何言いだしたの？」

今度は密談を交わすみたいな声で問いかけたあと、まだ三分の一も食べていないカレーの皿にスプーンを置いて身を乗り出して来る。

「テスト勉強のしすぎで熱出たとか？ 知恵熱って言うんだっけ？」

触らせて、なんて言いながら、華やかなマール柄のネイルを施した指先を、額に伸ばしてくる。

「違うよおー。しかもそれ、子供が出すやつでしょっ」

明音にからかわれるのは毎度のことだけど、その手をやりわり払いのけ、頬を膨らませて否定しておく。

「……それに、急にでもないよ。明音には前から相談してたじゃない」

「相談って……あ、例の？」

明音がテーブルの下に手を引っ込めて訊ねる。

「うん。ずっと、ずーっと考えてたけど、いくらお父さんの言いつけでも、やっぱりそれだけは素

直に従えない」

キツパリハッキリした口調で断言してから、手元のお盆の中を覗き込む。

オーダーしたのはAランチ。五穀ごはんには煮込みハンバーグと付け合わせの温野菜。そして存在がわからないくらいに細かくカットされたベーコンとオニオンの入ったコンソメスープ。

何の気なしにスープが入った白いマグに目をやった。そういえばあの日も傍らには白いカップがあった――もっともプラスチックでもなければ、傷や汚れが出来るほど使い込まれてもいないけれど。

冷房の効いた食堂ですっかりぬるくなっただろうスープ。そこに映る強張った自分の顔の向こうに、一ヶ月前の記憶を映し出した。

* * *

父である篠宮詠一からそれを初めて告げられたとき、正面のテレビから流れる歌番組を観ていた意識が、全部そちらに持っていかれた。驚きのあまり手にしていたティーカップをソーサーの上に落としそうになる。

お気に入りのジノリのカップは持ち手が華奢で、ほんの少しの衝撃にも耐えられないだろう。慌てて持ち直したところで、顔を上げた。

「――ごめん、お父さん。もう一回言つて？」

リビングにある、二人暮らしには不釣り合いな四人がけの直角形のソファ。その角を挟んで隣に座る父に、恐る恐る問いかける。

もちろん、聞こえてないわけじゃなかった。その逆。聞き間違いであってほしいと思ったからこそ確かめたかったのだ。今のは、幻聴だったと。

ところが――

「清花には、大学卒業と同時に結婚して、家庭に入ってもらうことになる……と、そう言ったんだよ」父は顔色ひとつ変えず、わたしのお揃いのカップに注がれた紅茶を優雅に啜る。ミルクを入れるのが好みのわたしに合わせて、中身はアッサム。父はそれをストリートで飲むのが習慣。

そして、淡々とした口調で同じことを繰り返すだけだった。

……え？ え？ え!?

何？ お父さんったら、何言ってるの？

輸入代行会社を営んでいる父は忙しく、ここ最近は何に会話を交わす機会がなかった。その父にわざわざ時間を作ってもらったのは、大学三年の夏を迎えてもなかなか希望の進路を見出せず、人生の先輩として相談に乗ってほしいと思ったから。

相談といっても具体的な質問を用意しているなんてことはなくて、例えば、

今からでも何か資格を取っておくべき？ とか。

やっぱ就職するとしたら一般職かな？ とか。

はたまた、一年か二年くらい留学っていうのも面白いかなあ？ とか。

自分でもずいぶん暢気に構えているなと思うけど、卒業まではあと一年半もあるという余裕がそうさせたんだと思う。だから父にも、明確な回答は求めていなかった。わたしの進路に対して、父がどんな意見を持っているのかを軽く訊いてみたかった。ただそれだけ。

なのに……大学卒業と同時に、け、け、結婚!?

「何それっ、わたし、そんなこと全然聞いてないよっ？」

言いながら、カチャンと音を立ててカップをソーサーに戻す。それまで熱心に見ていたテレビの内容なんてもうどうでもよくなっていた。

「もしかしたら、清花に直接話したことはなかったかもしれないね」

父は髭を蓄えた口元に、穏やかな笑みさえ浮かべて頷いた。

話を要約するところ。父が幼なじみの友人と、かつて『お互い家庭を持ち、子供ができ、その子供が異性同士だったら結婚させよう』という約束を交わした――という、若者同士にはありがちな微笑ましい夢語り。

そんな父も還暦まであと四年。普通なら時効になってもおかしくないんだけど、律儀なのかよほど強い意志が存在したのか、二人の気持ちは変わらなかった。何十年の時を経て、今その夢が現実になろうとしてるってわけ。

「それってつまり……許嫁ってこと？」

喉の奥から絞り出すような声で訊ねる。

いいなずけ。日常生活で発音するなんて思ってもみなかった言葉。

「そういうことになるかな」

許嫁——イコール婚約者。

まさかわたしの知らないところで、わたし自身の婚約の話が進んでいたなんて！
そんなのあり!?

「で……でも、その人とお会いたこともないのに、いきなり結婚だなんて」

「心配しないでいい。何しろ、私が最も信頼を寄せている男の息子だ、きっとお前も気に入るよ」
自信満々の口ぶりだった。

き、気に入るって言われても、まだどんな人かもわかってないっていうのに。

だいたい、相手の善し悪しを判断するのはわたしのはずじゃあ？

「どうした清花、そんな顔をして。もしかしてとは思いますが、もう将来を約束した相手でもいるのか？」
呆氣にとられてみると、父が心配そうに訊ねてくる。

「それは……いつ、いないけど」

ぐっ。哀しいけど即答するしかない。

わたしには特にこれといって打ちこむ趣味もないため、週末は家でゴロゴロしている姿をバッチリ見られている。嘘をついたってボロが出るだけだろう。

父は予想通りとばかりに満足げな笑顔を見せた。

「なら、ちようどいいじゃないか」

「そ、そりゃ恋人なんていないけど、それとこれとは別問題っていうか……あ、そう、相手の人

っ！ その相手の人だって、きつと困ってるんじゃないかな！」

このままじゃ父のいいように話を進められてしまう。鈍い頭をフル回転させて、考え直してもらえそうな要素を突いてみた。

「困る？」

「うん。その相手の人も、いきなり親同士の昔話を持ちだされて、困ってるかもしれないよ？ それこそもう決まった人がいるかもしれないし」

相手の彼もわたしみたいに、何の心の準備もなく告げられた可能性がある。

昔ならいざ知らず、自由恋愛が基本となっている現代で、突然許嫁の存在を匂わされても受け入れられないに違いない！

と思いきや——

「そんなことなら心配いらなぞ」

「え」

「相手方も縁談に前向きだって話だからな」

「ええっ？」

くらり。眩暈がする。

それじゃ、何事もなければ……この時代錯誤な家同士の婚約が、成立してしまうっていうの？

「件の友人は与党の政治家なんだ。家柄もしっかりしているし、嫁に行くにはこれ以上ないくらい安心できる家系だ」

「……………」

「息子は友人の次男坊で親の跡は継がないようだが、優秀なプログラマーらしい。こう、華やかな職種ではないかもしれないが、真面目で礼儀正しい男で、なかなか見所があると思っっているんだよ」

「……………」

「彼は清花とはちよつと歳が離れているかもしれないが、夫婦はある程度の歳の差があつたほうが上手くいくつていう話を聞かし——」

「……イヤ」

まだ見ぬ婚約者について意気揚々と語り出す父を遮つて、わたしは静かに訴えた。

「そんな、わたし、婚約なんて無理だよ……」

「清花」

「いきなり婚約つて言われても、そんな、全然イメージ湧かない。まだ学生だし、今まで考えたことだつて、ないし」

頭がこんがらがつて、何から伝えるべきなのがわからない。

動揺を隠せないまま咬くわたしの頭に、父の温かな手がそつと触れる。

「戸惑う気持ちはわからなくないが、これも清花のためなんだよ」

「……わたしのため？」

「そうだ」

父は深く息を吐いてから、わたしの瞳を覗き込む。

「私はね、清花。お前が心配なんだよ。大事な一人娘だし、たつた二人きりの家族だろう。そんなお前をどこの馬の骨ともわからない男に渡すわけにはいかない。第一」

こちらに向けていた視線を遠くへやりながら、父が綻んでいた表情を引き締めた。

「——お前をきちんとした形で幸せにしてやらないことには、死んだ清美に申し訳が立たないからな」

清美というのは、わたしの母の名前。

母はわたしが小学一年生のとき、病気で亡くなった。まだ三十代半ばだったそうだ。

母が亡くなる前、病室で様々なことを話した。主にわたしの学校生活や友達のことなどが話題だったけれど、母の思い出話を聞く機会も多かった。

例えば父と母の馴れ初め。それは、母の父——わたしにとってはお祖父ちゃん、だけど——が、部下だった父を自宅に連れてきたことだった。母は父に出会った瞬間、何か引き寄せられるものがあつたのだという。

父は、今でこそ年齢を重ねたせいで、千円札に刷られてる髭のおじさん——ああ、誰だったっけ、あの人——って感じだけど、昔はスラリとした細身でくりつとした眼差しが印象的なイケメンだったそうだ。

出会ってから程なくして二人は結婚し、わたしが生まれた。

『お母さんね、結婚っていうのは、生涯——生きている間つてことね、その生涯でただ一人、この人だけを愛していきますつていう誓いだと思うの』

記憶の中の母はまだわたしより年上だけど、それでも少女のようにピュアで可愛らしい人だったのを覚えている。あのときの言葉通り、母は自らの生涯で父だけを愛し抜いた。

『清花も大きくなったら、お父さんみたいな素敵な旦那さまを見つけるのよ。お父さんみたいに、優しくて、誠実で、頼りがいのある素敵な旦那さまをね』

お父さんみたいに素敵な旦那さまを見つける——母の願いは、いつしかわたしの願いとなった。仕事と育児を両立しながら、男手一つでわたしを育ててくれたお父さん。そんなお父さんが自慢であり、憧れでもあるから、いつかわたしにも二人のような素敵な出会いが訪れれば素晴らしいことだなと。

でも。でもでも。人生、そんな風に都合よくはいかないんだってば！

素敵な出会いどころか、この二十年間と数ヶ月生きてきてただの一度も男の人と付き合ったことなんてないんだから。

「ファザコンの清花は、理想が高すぎるからじゃない？」なんて言われたりする。

正直、それもちよつとはあるかもしれない。「お父さんを超えるような人じゃないと」って意識してる部分は確実にある。

だけど一番の原因はもつと根本にあつて、それが何なのかも気付いていたりする。

「……だから安心しなさい、清花」

「お父さん……」

「今まで私の言う通りにしてきて、何も悪いことはなかっただろう？」

「……………」

「今回だつてそうだ。清花のことは、私がちゃんと幸せにしてやるから」

——それは、父が、わたしに恋愛をする隙^{すき}を与えてくれないこと。

父一人、子一人。今まで過剰なほど、父親という存在に守られて育ってきた。

守るといえば聞こえはいいけれど、わたしのためといっては、普通の子の場合では考えられない制約をたくさんかけられてきたのだ。

正直、窮屈^{きうくつ}だなど思うことも多かったし、破りたいと思うことも多かった。

そういうときには、母の言葉を思い出した。

『……お母さんはきつと、清花が大きくなるまで傍にいてあげられないと思うの。お母さんの分までお父さんのこと、大事にしてあげてね』

母の分まで父を大事にしなければ——その使命感で、父に逆らったことはなかったし、父からの提案には全てYESを貫いてきた。それが『お父さんを大事にする』ってことだと信じてたから。だけど……

『とにかく、あなたが本当に愛しいと思う相手と結ばれてほしいってこと。それがあなたの幸せだと思うから』

母が遺^ゆした別の言葉を思い返しながら、納得のいかない気持ちでいっぱいになる。

「それが、お父さんの考える、わたしの幸せ？」

「清花？」

「わたし、お母さんが死んでから、お父さんの言いつけには絶対逆らわないようにしてきた。そうすることが正しいって疑わなかったから」

「……………」

「でも、これだけは——婚約の話だけは、素直に『そうします』って言えないよ」

今までなんとか耐えられたのは、大人になれば自由になれる、自分の好きなように出来るはずっていう希望があったからだ。

でもそうじゃなかった。結婚という、人生の中で一番重要だといっていいイベントすら、父の意思によって決められようとしている。

そんなのやだ。無理。ありえない。

自分の結婚相手くらい自分で決めたいっていうのはいけないことなの？

大学生になったしハタチも過ぎたんだから、わたしももう立派な大人。

それなら、そろそろ自分のことは自分で決めたって——わたしはわたし自身の判断に基づいて行動したっていいじゃない！

まさか反抗されると思っていなかったらしい父は、しばらく腕を組んだまま動かなかった。

……怒ったのだろうか？

視線の端で確認しただけなので、感情が読めない。不安になったわたしは、俯うつむけていた顔をこわごわと父へ向けた。父は、真面目な顔をしている。

「……清花の気持ちは、わかった」

自らを納得させるかのように、父は何度か頷うなずいてみせながら漸やうやうく言葉を吐きだした。

よかった。怒ってるわけじゃないみたいだ。

「まあ、大学を卒業してからの話だし、今すぐに心の整理をつけると言っているんじゃない。そのうち、決断してくれたらいいんだから」

父はその場で明確な答えを出すのを避けた。まるで「踏ん切りをつけるのを待つよ」、とでも伝えるように。

あれれ、お父さん。……それって遠まわしに「卒業までは猶ゆう予期間だから、それまでには決心しろ」って言うてるようなものじゃないっ！

そうじゃないんだってば。精一杯、婚約だけは嫌だって伝えたつもりだったのに。

——どうしてわかってくれないの!?

* * *

「大変だよー。おとーさん、清花のこと溺愛してるもんねー」

名古屋のアゲ嬢もびつくりするほどのゴージャスな巻き髪を指先で弄いじりながら、明音が言う。

「溺愛ってほどじゃないにしても、干渉はそれなりに、ね。まさか勝手に婚約の話を進めてるほどとは思ってなかったけど」

あはは……と力のない笑みを浮かべる。

わたしはいわゆる箱入り娘というやつなのだと思う。母を亡くし、自分一人で育てていかなければというプレッシャーを感じていたのか、父の教育方針にもそれは色濃く表れていた。

例えば学校選び。わたしがこの歳まで父以外の男の人との係わりを持たずに生きてこられたのは、初等部からここ——礼櫻女子学院大学の附属校に通っていたからだ。

東京の片田舎にある礼櫻は文字通り女の園。先輩も後輩も同級生も女、女、女。当たり前ながら、今この食堂を見回してみても百パーセント、女の子しかない。

学校生活といえば、門限も厳しかった。初等部のころは寄り道や友達の家遊びに行くのは禁止だったし、高等部に進んでも十七時という驚異的な早さで、部活動もままならなかった。

大学生になった今、少しはマシになったとはいえ十八時。当然、サークルやアルバイトは禁止。そりゃあ、学生の本分は勉強ですけど、わたしだって少しは仲のいい友達と遊んだり、働いてお金を稼いだりしてみたいのに。

「そーゆーのを溺愛っていうの。『ワシが認めた男じゃないと許さーん』ってやつでしょ。めっちゃ大事にされてるよね、うらやましいー」

「……全然、感情こもってないんですけど」

メロディを奏でるみたいな彼女の言い方がしらじらしい。

「あはは、当たり前。あたしと同じ立場だったらムリだもん。絶対に耐えられない。附属から礼櫻のこつてお嬢様が多いけど、とりわけ清花の家は厳しいよねー」

他人事みたいにひらひらと手を振って笑っているけど、そう言う自分だって同じ附属校出身のお

嬢様なのに。

明音とは礼櫻の初等部から一緒という長い付き合いだ。

大河内といえど誰もが知ってる製薬関係の一大企業だけど、意外にもお家は放任主義らしく、わたしの置かれた境遇を珍しがっている。

夜遊びや外泊は当たり前、夕食も家で取る日のほうが少ないんだとか。何ともアクティブ。だからかわからないけど、明音本人も全然気取ったところのないサバサバした面白い子。

一般的に礼櫻のイメージは『お嫁さんになりたい清楚な女の子』らしいんだけど、明音はそれに反して濃いめのメイクや肌を出す服が好きらしく、セクシー系っていうのかな……そういうのをよく着ている。

今だって、学食内では白やパウダーピンク、ライトブルーなんかのパステルカラーで纏めた、いかにもお嬢なファッションが多い中、幾何学模様のオフショルダーという個性的なミニワンピースを見事に着こなしている。余談だけど、組んだ足から下着が見えそうだとかで、試験の前、男性教授に名指しで注意されたりしていたつけ。本人はどこ吹く風だったけど。

「まー、おとーさんの気持ちもわかるなあ。清花ってボーっとしてるし、なーんかちっちゃくて誘拐されそうな感じするもんね」

「誘拐って、もー、また子供扱いしないでよー」

父がこもも過保護なのは、明音の言うようにわたしがぼんやりしている上、小柄であるのも一因なのかもしれない。

女の子の平均身長といえど百五十センチ台後半だったと記憶しているんだけど、わたしはそれを大きく下回る百四十八センチ。小さいころから好き嫌いせず何でも食べていたはずなのに、初等部の終わりを境に縦には一切伸びなくなってしまった。

通学電車で寿司詰め状態になると、他人の背中が壁に見えて、圧迫感から具合が悪くなることもしばしば。

せめてスタイルだけは……と思うのだけど、残念ながららの幼児体型。身体の肉付きが薄いかわりに、バストもヒップも小さく、モデル体型の明音にはよくこうやってからかわれている。

「だけど家出はやりすぎじゃない？ それにあんた、ドコに転がり込むつもりなの？ 言っとくけどウチは足つくからダメだよ」

「それはまだ決めてない」

「決めてないのに家出するとか言ってるの？」

呆れた。彼女はそう言いたげな顔をしている。

「夜に歩かないから知らないだろうけど、いかに日本が治安のいい国だからって、フラフラしてたら危ないんだよ。清花がアブないやつらに引っかけたりしたら、おとーさん、ショックで倒れちゃうよ」

「……あう」

夜の街でアブない人たちに追いかけているところを想像して背筋が冷たくなる。

わたしだって出来れば危ない目には遭いたくないし、いたずらにお父さんを困らせたくはないん

だけ……

「で、でも本当に嫌がってるのを伝えるには、いなくなるしかない気がするの。ほら、ずっとお父さんに従ってきたものだから、娘は思い通りになるって思っちゃってる気がするんだよね。だからここで、わたしだって自分の意見を通したいときがあるんだってアピールしなきゃでしょ」

「……背に腹はかえられないってワケか。でも、だからってなあー」

明音がスプーンを握り、カレーを口に運びながら唸った。

何度か咀嚼したあと、ブラウンの縁つきコンタクトを入れた大きな瞳を瞟る。何か閃いたようだ。

「そうだ、あたしが間に立ってみようか？」

またスプーンを皿に置き、提案する。

なるほど、それは魅力的な申し出かもしれない。

わたしの友達関係にすら口を出してくる父だけど、初等部からの付き合いである明音のことは妙に気に入っていて、年に数回、明音のお家にお呼ばれしたときに限っては門限に関係なく外出を許してもらえるくらいだ。上手くいく可能性は存分にある。

けれど、わたしはゆっくり首を横に振った。

「せっかくだけど、それはやめておく」

「どうして？」

「万が一、それが原因で明音のことを悪く思われちゃったら嫌だし。そしたら友達いなくなっちゃうもん」

「あー、そっか」

ぽりぽりと首の後ろを掻きながら頷く明音。

なかなか学校外で遊べないわたしと、辛抱強く友達でいてくれた明音は貴重な存在だ。父が明音に悪印象を持って、今までみたいに付き合えなくなるのだけは避けたい。

「やっぱりわたし自身がどうにかしなきゃいけないんだよ。うん、お父さんには悪いけど、家出しかない」

「清花あー」

「ちゃんと家出先は探すよ。見つかったから家出する」

あては全くないけれど、とまでは言わなかった。

鼻息荒いわたしを、冷静な親友はどうにか思い留まらせようとしているみたいだった。

けれど決意が固いことを知ると、ふうっと息を吐いて同情的な視線をくれる。

「……でもそーだよ。いつもはおおらかな清花だって、ムリヤリ婚約させられちゃうとなれば、イイコになんてしてられないか」

「当たり前だよ、人生かかってるんだもん」

この分じゃわたしの意思なんて関係なく、強制的に結婚まっしぐら。そんなの絶対に無理に決まってる。

「あれだね。清花は良くも悪くも、今まで従順すぎたのかも。親に反抗的な態度を取ったことなんて一度もないでしょ？」

「うん。考えたこともない」

「わー、ちょーマジメ。あんた、すごいわ」

淀みなく答えると、明音はうつすら上唇についたカレールウをべろりと舐めながら感心した風に言った。相変わらず、他人を褒めるのが下手だなあと思う。

「……でも今回は別だよ。そもそも、会ってもいないのに婚約だなんていつの時代の話？　しかも親同士の約束だなんて」

「まーね。出会い系とかお見合いパーティでさえ、当人の意思でするものだし」

そこまで言うと、明音の苦笑が揶揄に取って代わる。

「その上、清花は筋金入りの処女だもんねー。カレシもいたことないし、キスとかハグとか、一通りの経験ゼロでしょ？」

「ちょ、ちょっと明音っ、あんまり大きい声で言わないでよっ、恥ずかしいからー！」

隣でラーメンを啜っていた子が、物珍しそうにこちらを見た気がする。……明音ったら、公共の場でそんなことバラさないでほしいのに。

わかってますよ。礼櫻の学生っただけで男の人の食いつきが良くなると言われるほど、礼櫻のブランドは確立している。ゆえに、礼櫻の女の子はモテるのだ。

普通にしてれば引く手あまただって言いたいんだろうけど、そんなのやっぱり人によるんだと思うよ、人に！

「あーごめんごめん。でも事実でしょ？」

「むう、ほつといてっ」

にしたって、わざわざ言葉にされると面白い。

「——じゃあ、どうしても彼氏ができるのか教えて下さいよ。経験豊富な明音先生」

「そうだねー、あたし思うに」

かけてもない眼鏡のフレームを、くいつと上げるような仕草をする。

明音は恋多き女の子だ。男の子をとつかえひつかえというわけじゃないけど、高校生を過ぎてからは彼氏が途切れたことがないように思う。意外と言ってはいけないけど、男の子受けはいいみたかった。

「清花の場合は絶対的に出会いが少ないんだよね。門限早くてサークルもバイトもダメ、休みの日も特にやることなくて家にいるんですよ。出会いがないんじゃないや発展のしようがないし、経験値だつて上がらないよ」

明音の言う通り、出会いの機会ほぼゼロに等しい。生活基盤の大学はご覧の通りの女の園だし、他大学と繋がるチャンスも一切ない。

……あ、でも。

「経験値なら稼いでるよ」

「……どゆこと？」

「えへへ、最近好きなのはコレ！」

首を傾げた明音に、わたしは椅子の背もたれに置いていた通学バッグの中を漁り「じゃんつ」と

効果音を混ぜながら一冊の漫画本を取りだす。そして、書店のカバーを外して彼女に見せた。

ポップな字体で『とらべる×ろまんす』と書かれた表紙には、互いを見つめ合う男女のイラストが。今どきのカジュアルなファッションに身を包む女子と、作業衣を着ているクール系の男性。

この二人は、ヒロインの^{しちか}栞、そしてヒーローの^{しんみ}詩文。

詩文の指先が栞の顎を持ち上げ、見上げさせるような構図がたまらない。ああ、叶うものなら栞になりたいっ!!

なんて叫びたくなるくらい、『とらべる×ろまんす』——世間での略称は『とら×ろま』らしい——は、わたしが今一番ハマっている女性向けの恋愛漫画なのだ。

「あー……ハイハイ、なんだ経験じゃなくて疑似体験じゃん」

差し出した漫画を^{いちぶつ}一瞥するなり、明音はげんなりと肩を落とした。何よう、その反応は。

「疑似体験だっていいじゃない。面白いから明音も読んでみなよ、キュンキュンするよ! この

お話はね——」

『とら×ろま』は人気恋愛小説家である^{あひの}愛野詩文と、詩文の書く小説の大ファンで女子大生の押花^{おぼな}栞が稀有な運命を経て出会い、徐々に惹かれあつていく……というラブストーリー。

この物語のウリはワイルドかつフリーダムなヒーロー像にある。住所不定の詩文は気分の赴くままに日本各地を転々とし、昼間はその土地ならではのアルバイトに勤しみ、夜は執筆活動に没頭するという暮らしを続けている自由人。

書く物語は胸やけしそうなくらいベタベタの甘々なのに、私生活ではハードボイルドな言動を見

せるタフでクールな詩文。そのギャップがたまらなく素敵なのだ。

この漫画、女子中高生を中心にカルト的な人気を誇ってはいるのだけど、あまりに破天荒すぎるというか、リアリティに欠けるということでOLからの受けはあまりよくないんだとか。……そこがイイだけだなあ。

「ちなみにヒロインの栞の性格も斬新な設定で、旅先での詩文の健康が気にかかるあまりノイローゼになって、彼の後を付け回してストーカー化しちゃうんだけど、彼つてばそれくらいじゃ全然動じない心の強さを持つてるんだよねー」

「ごめん、そのあらすじのドコでキュンキュンしたらいいの？」

明音は露骨に眉間に皺しわを寄せると、わからないというように首を横に振り、漫画を押しつけるように手のひらを見せる。結構です、と。

「え、何で〜？」

「突飛すぎるでしょ。つてか、そーゆーのはリアルで間に合ってますから」

明音はきつと、わたしみたいに漫画で恋愛要素をチャージする必要はないのだろう。

「縁がないのはわかるけどさあ、そーゆーのに逃げちゃダメだつて」

「別に逃げてるわけじゃ——」

「理想だけ膨らんで、マジで彼氏できなくなるよ？」

「うっ……」

的確かつ厳しいお言葉。お話の世界に逃げてるつもりはないにしても、それで満足してしまいそ

うになっている感是否めない。

だって面白いんだもん——と内心で言い訳をしつつ、食器の載ったお盆の脇に漫画本を置いた。

「——でも、そう、トラベル……旅行、か」

人差し指を下唇に当てながら、ひとりごとみたいに呟つぶやく明音。

「うん？」

「旅行……旅行、ねえ」

『とら×るま』を指しているのだろうか。タイトルにもあるように、ものすごくスパンの長い旅行の話っていう風に読めなくもない。

でも、それがどうかしたんだらうか？

明音は唐突に両手を合わせ、小さく叫んだ。

「——そう、旅行だよ！ 一人旅！」

「え？」

「あたし、やつぱマジな家出つてのは賛成できない。でも、プチ家出つてか、家出つていう名の一人旅ならアリだと思う」

何かものすごい公式を編み出した数学者みたいな口調のまま、彼女が続けた。

「あたしも前々から思ってたんだけど、清花だってフツの女子としての経験をする権利があるよ。いや、するべき！ 大学はこれから夏休みに突入だし、気分転換も兼ねてさ、ぶらっと一人旅に出てみたら？」

「……わたしが、一人旅に？」

「そ。おとーさんに婚約拒否の主張はしつつ、何日間か好きな所に行って、普段じゃできないことしてきたらいいじゃん。ね、それがいい」

これ以上の名案は存在しないと、明音は得意気に腕を組む。

「そんな簡単に言うけど……わたし、今まで旅行らしい旅行なんてほとんどしたことないのに、大丈夫なのかな」

「今の今までガチな家出しようって意気込んでた人間の言う台詞^{せりふ}？ 一人旅のほうが断然ハードル低いじゃん。何を躊躇^{ためち}う理由があんのよ、マジうける」

わたしの矛盾した発言がツボにハマったらしく、明音は長テーブルを叩いて笑い出す。

うう、そっか、言われてみればそうなのかも。家出をする度胸があるなら、一人旅くらい余裕だろうってこと。

うーん。でも一人旅かあ……それって知らない土地にひとりで向かうってことだね。

何となく、家からそんなに離れていない場所で、明音に頼んで一緒に潜伏するようなことをイメージしていたから、逆に難しい気がしてしまう。

「それにさー、出会いを求めてるなら、旅行はもってこいだと思うよ」

渋るわたしに、明音は違う言葉で興味を煽^{あお}ってくる。

「どういうこと？」

「旅は出会いって言うでしょ。たとえ短い期間だとしても場所や環境が変われば、清花がいいと思

うような男の人と出会うチャンスがあるかもね」

「……ほ、本当っ!？」

「あー……絶対とはいきれないけど、希望的観測だつていいじゃん。準備期間含め、清花が楽しむことが一番重要なんだからさ」

思ったよりも食いつきがよかったことにビックリしたのだろう。彼女はちよつとたじろぎながら答える。

考えれば考えるほど悪くない条件だった。家から抜け出せる。家出先の心配をしなくていい。それに出会いのチャンスもある。一石二鳥ならぬ一石三鳥だ。

「今までずっとガマンにガマンだったんだから、これくらいワガママは許されるっしょ。清花のおとーさんには内緒にしておくし。あたしもサポートできるところはするからさ」

「ね？」といったずらつぽく笑いかける明音。

彼女の言葉が、最後の一步を踏み出せないわたしの背中をトンと押した。

……そうだよね。

わたし、ずつとずつと、ずーつと我慢してきたんだもん。

友達と遊びたいのも、日が暮れてから出掛けるのも、好きな人をつくるのだって。

もうハタチなんだもん。大人だもん。

明音の言う通り、ちよつとだけワガママを通すくらい、自分の好きなことをするくらい許されるはず。

この際、自分ひとりで新しい世界の扉を開けてみるっていうのもいいかもしれない。

「……明音。大丈夫だよ、ひとりでも」

だから決めた。

わたし、この夏休みに家出——もとい、家出という名の一人旅をする！

「大丈夫大丈夫。……よし、そうと決まれば作戦会議をしなくちゃね。メインの目的は婚約阻止なんですよ。おとーさんへの対策を考えつつ、楽しい旅行にしよう」

「うん。ありがとう」

決断してしまおうと、今まで胃の辺りに何かが詰まったような重苦しさが取れ、急に食欲が湧いてきた。

明音がカレーライスを平らげるようになって初めて、わたしはAランチに手をつけ始めたのだった。

2

その後何度か行った作戦会議により、一人旅の準備は着実に整えられていた。

この一人旅の目的は、自宅から数日姿を消してそれだけ婚約を拒否している旨を知ってもらい、父を諦めさせること。

決行日は、九月十日の月曜日に決まった。

本当はもう少し早めがよかったのだけれど、試験が終わったのが七月の下旬。そこから夏休みに突入し、何だかんだでスケジュールの詰まった明音と打ち合わせの予定が合わず、親戚との集まりがあるお盆を挟むと、いつの間にか八月の終わりになってしまったというわけ。

ちよつと遅れてしまったけれど、待つ楽しみというのものもあるもので心はウキウキと弾んでいた。

学校行事を除いたら初めての遠出。しかも一人きりで。

新幹線の手配なんて当然したこともないし、方法もいまいちよくわからなかったから、その辺りは明音を頼って任せてしまった。

行き先については、「絶対にここ！」って場所はなかったんだけど、明音に相談したり、書店のガイドブック売り場を眺めたりして、京都に決定。日程は二泊三日。

実は京都に行くのは二回目。高等部での修学旅行で訪れたことがあった。

いつそ本州から離れて北海道や沖縄っていうのも魅力的だったけど、全く知らない土地に行くよりは心強かったし、パンフレットに載ったモダンとクラシックが入り交じる街並みに興味をそそられて——なんでもっともらしいことを言いつつ、最大の理由は実に単純。

京都に一人旅って響きがカッコいい！

これに尽きる。素直に言うともた明音に呆れ顔をされそうなので、黙っておいた。

そんなわけで、まさに「そうだ京都行こう」な気分になったわたしは、計画を阻害されないように、決行当日までを普段以上に大人しく過ごした。変に鋭い父に勘付かれやしないかとヒヤヒヤし

ていたけれど、杞憂^{きゆう}だったようだ。

そして決行当日——九月十日がやって来た。

いつも通り七時に起床したわたしは、週に三回通いで家事をこなしてくれるお手伝いさんがストックしてくれた冷凍のおかずを温めて、いつも通りに朝ごはんの支度をする。

少し遅れて起きてきた父と、いつも通りにダイニングで二人きりの食卓を囲んだ。

「清花、今日の予定は？」

「お昼過ぎまで駅の裏の図書館で調べ物して、家に帰ってきたら課題のレポートを片付けちゃおう
と思って」

「そうか」

朝食の時間にわたしの一日のスケジュールを確認するのが父の日課。

門限さえ破ったりしなければ特にダメ出しはされない。単にわたしの行動を把握して安心したいのだろう。

二ヶ月前のあの日から、顔を合わせても父の方から婚約の話に触れてくることは一切なかったし、わたしも詳しく訊^きこうとは思わなかった。

確かめたわけじゃないけど、お互いに堂々巡りを避けたかったのだ。

父は婚約させたいし、わたしはしたくない。

また気まずい雰囲気になるのはわかりきっているのだから、それなら敢えて話題にしないのがベストだろう、と。

会社へ向かう父をいつも通りに笑顔で送り出したあと、いつも通りに食器を片付け、いつも通りにメイクを始める。

メイクが完了すると、わたしは明音に一通のメールを送った。

『あと三十分くらいしたら東京駅に向かうね』

すぐに返信がきた。そこには

『わかった。じゃあたしも支度するわ』

と書かれている。

その場で『了解！』と短く返事を返し、二階にある自分の部屋に向かった——いつもとは違う、大イベントの準備のために。

まずクローゼットを開くと、今日に合わせて新調した服を引っ張り出し、着替える。

レースの付いた小花柄のワンピースは、普段のわたしなら敬遠するデザイン。ショッピングに行ってくれた明音と店員さんに強く勧められて、ついつい買ってしまったのだった。

服に着られてる風に見えないか心配で姿見の前に立ってみる。予想よりも違和感がなくてホッとした。

次はヘアスタイル。ドレッサーの前に座り、胸の下まである絡まりやすく細い髪を丁寧にブラシで梳^とかしていく。

こういうスイートな服に合わせるなら巻き髪が一番だけど、黒髪だと不自然かも……と、取り止め。そうでなくてもやり慣れないわたしのこと、火傷でもしたらいきなりテンションが下がってし

まう。背伸びをせず、両サイドを編み上げてハーフアップにしよう。

わたしも明音みたいに髪を染めたり、パーマをかけたりしたいな。でもお父さん、そういうことしようとするのちょっと寂しげな顔をするし。

とか考えつつ、編み目が不揃いな三つ編みを二本作って、後頭部に持ってくる。

簡単な割に、編んだ部分をバレッタで留めて仕上げると華やかになる。鏡に映る自分がいつもよりも可愛く見えて、つい微笑みかけた。

立ち上がり、再びクローゼットの前に移動して取り出したのは、キャリーケース。外側は軽さを重視したナイロン生地で、黒地にホットピンクのドット柄。今回の旅行のためにこっそり買った、二三泊用の小さめのものだ。

着替えや化粧品などを詰めたそれを扉の前に置いて、携帯電話で時間を確認する。うん、ジャスト三十分。

わたしは通学でも愛用しているキャメル色のポストン型トートバッグを肩にかけると、キャリーケースを引きずって一階に下りた。

そして、先ほどまで父と二人で朝食をとっていたダイニングで一度荷物を下ろす。あまり余計なものを入れていなかったつもりなのに意外と重い。

キャリーケースのポケットに忍ばせていた封筒を取り出し、テーブルの上に置いた。

曲線を多用した脱力系のキャラクターが描かれたカラフルな封筒は、家出にはつきものの置き手紙。これを読むことになるだろう父にとっては、見た目に反して緊張感溢れるものであるかもしれない。

ない。

『お父さんへ やっぱり婚約はしたくありません。探さないで下さい 清花』

悩んだ挙句、そっけないくらいにシンプルな文章に落ちついた。

初めは便箋三枚に渡って切々と気持ちを書き綴ったつもりもしたけれど、簡潔なほうが真っ直ぐにわたしの気持ちが伝わる気がして。

『探さないで下さい』なんて書くと、いかにも家出っぽい感じ。父に対して罪悪感も覚えるけど、それ以上にワクワクしてしまっている自分がいる。

たとえるなら、モンスター討伐の旅に出る前の冒険者のような。

訪れる場所も、タイミングも、行動も、全て自分が——わたし自身が決める。

「行ってきます」

両手に荷物を抱えると、わたしは誰もいない廊下に向かってそう呟き、家を出た。

* * *

「清花、こっちこっち！」

「あっ、明音！」

携帯電話から聞こえてくる声と、十メートル先に立つ女性の唇の動きが一致する。

親友の名前を呼ぶと、彼女は携帯を持つのは逆の手を大きく振ってみせた。

「見つかったよかったあ。駅が広くて道に迷っちゃったよ」

九月に入ったとはいえ、まだまだ夏の陽気。動きまわったせいで額に浮かぶ汗を指先で拭いながら駆け寄ると、旅だから歩きやすいようにと選んだ、リボン付きのバレエシューズがぺたぺたと鳴る。「だろうと思った。もつと見つけやすい場所にしたらよかったかなー」

お互いに携帯をしまいつつ、顔を見合わせて苦笑を浮かべた。

明音が待ち合わせで指定してきた構内の広場は、平日なのに確かに人が多かった。普段、あまり大きな駅を利用しないわたしにとつては迷路に放り込まれたのかと錯覚するほどだ。

「うん。それよりごめんね。駅まで付いて来てもらっちゃって」

明音はわたしの見送りに来てくれたのだ。冒険に不安はつきもの——なのだろうけど、暫らくこうでひとりになることを考えると、旅のスタートから孤独なのは心細かった。

「いいっていいって。通学以外では家からほとんど出ないあんたが、何日間も遠出するんだもん。

あたしのほうが心配になるよ」

杉並区にある自宅から東京駅までは快速電車一本、時間にして三十分程度なのだけど、明音もそんなわたしの気持ちを理解してくれたらしく、二つ返事でOKしてくれた。持つべきものは初等部からの親友だ。

「つてかさ、そのワンピースいーじゃん！　ちょー似合ってるよ」

「ほんと？　ありがとう」

明音がバフになっているワンピースの袖を軽く摘んで頷いた。

今日の彼女のネイルは、真っ赤なベースにゴールドのグリッター。デニムのショートパンツに素足という、カッコいいスタイルに映えている。

わたしもお店でやつてもらえばよかった、と思う。昨日の夜、薄めのピンクを塗っただけのネイルを見てちよつと悔やむ。

「やっぱ清花はそーゆー服着た方がいーんだって」

「そ、そう？」

「雰囲気合ってる。普段着てるような焦げ茶とか黒とか、なーんかやばつたく見えるんだよね。こーゆーの、着れるうちに着ときな」

「あ、ありがとう」

やばつたい——そ、そうかもしれない。派手好きな明音にとって、わたしが自分で選ぶ服は暗いトーンのもが多く「お葬式みたい」なんだそうだ。

「ま、あたしに言わせりゃメイクももちよい濃いめがいいかなーって思うけど、清花の場合は素朴な感じが可愛いってのもあるから、丁度いいんじゃない？」

素朴って褒め言葉だよな？　よね？

……うん、そう受け取っておこう。

「引きずるのが大変そう」と笑う明音にキャリーケースを運んでもらいながら、二人で新幹線のホームに向かう。

「いよいよ京都に向かうわけだけど、ヘーキ？　おとーさんにバレてない？」

「う、うん。多分」

旅行の支度は全部自分の部屋で済ませたし、普段通りに生活していたから挙動でも不審さを与えていないはず。

「例の手紙はわかる場所に置いてきたよね？」

「うん」

「銀行のカードは持ってきた？」

「お財布の中に入れてきたよ」

「着替えはきちんと詰めてきた？」

「もちろん！」

「そうそう、変な男について行ったらダメだからね？」

「……明音」

たまに、明音はお母さんじゃないかと思うことがある。

わたしがいつもボンヤリしているからなんだろうけど、それにしたって子供じゃないんだから、むやみやたらと他人にくっついて行ったりなんてしないってば！

「だって清花ならありえそーなんかもん。あんたみたいに純粋なコを落とすために、恋愛漫画に出てくるような台詞を惜しげもなく言ってくる男だっているんだよ」

「……はい、気をつけます」

強く否定したいところだけど、もし少しでも『とら×ろま』の詩文を思わせる人に声をかけられ

たら、フラフラと行って行ってしまうかもしれない。

いや、そんな都合のいいことなんてありえないってわかってますけどね。

エスカレーターを上がって乗り場に着くと、わたしの乗る新幹線はもう姿を現していた。

乗車券に書かれている番号は六号車の1番のD席。六号車の乗車位置に移動する。

今からこれに乗り京都に向かって、うーんと羽を伸ばしてくるんだ。

「もしよさげな人と出会ったら、あたしに報告するんだよ。相手のことチェックしてあげるから」

「わ、心強いな」

「真面目な出会いなら応援するけど、遊ばれちゃうのはトモダチとしても嫌だし。……つてことで、コレ！」

気分が盛り上がってきたところで、ニコニコ顔の明音がおもむろに何かを取りだした。

メタリックなピンクのハート型で、平べったいコインケースみたいなもの。

「何？」

「あたしからのセンベツ。大人への一步を踏み出した清花に、ね」

「……明音」

なんだかんだ言っても明音は優しい。わたしのことを「ボーッとしてる」とか「ちっちゃい」とか言うけど、そこにはいつも愛がある。

「ありがとう、嬉しい」

受け取って、ジッパーに手をかける。中身は何だろう。

「あつ、今は開けちゃダメ」

「え？」

すかさず明音に制されて、その手を止めた。どうして？

「それはさ、もし旅先で『この人いいなー、素敵だなー』って思える人に出会って、好きで好きでどうしようもないって状況になったら開けてみて」

「……？ うん、わかった。そういう状況になるといいんだけど」

明音が何を入れてくれたのが気になるけど、わたしは素直に頷いた。

せっかくの一人旅だし、そういう人に出会える機会があったら本当にいいんだけどね。

「受け身じゃ出会いはやってこないよー？ 女の子一人でいると結構チャンスあるもんだから。おススメはカフェかバー。バーに行くなら、お酒は飲みすぎないこと」

「はい」

「それと、ホテルの予約をしていないっていうのは伏せておいたほうがいいかな。チャンスとばかりにつけこまれるかもしれないから」

「気をつける」

わたしがそう言うと、明音は不意に心配そうな声で切り出した。

「……今更にだけどさー、清花。ホントにホテル取らなくて良かったの？」

「うん、平気」

「やっぱり危ないと思うなあ。確かに安くはなるけど、そこはケチる必要ないって」

明音はホテルを押さえなかった理由を、経済的な問題だと思っているようだ。

アルバイトをしていないわたしにとって、自由になるお金は、自分が管理してる預金通帳に入っているごくごく僅かな分だけ。

普段、洋服や靴などを買うときには、その都度父に話して必要なお金を貰う形をとっているけれど、「家出をするからお金を下さい」なんてお願いはできない。この旅行は、その少ない預金をやりくりして過ごさなければいけない——のは、当たり前なだけだ。

「ケチってるんじゃないよー。もちろん安くしたいって気持ちはあるけど、気ままな一人旅って宿を決めないのが定番なんですよ？」

「はあ？」

綺麗に描かれた眉を寄せる明音。わたしはふふっと笑みを零した。

「明日の予定は、明日のわたしが決めるんだよ」

何を言ってるんだかわからない、と、明音の表情は訴えていた。

わからないはずだ。出典は、相変わらずハマっている恋愛漫画の『とら×ろま』から。

詩文の旅先でのポリシーのひとつに、絶対にホテルのリザーブはしない、というものがある。

『俺の予定を縛れるのは、締め切りだけだ。明日の予定は明日の俺が決める』

何という自由さ！ 何という奔放さ！

詩文の台詞に心臓を打ち抜かれたわたしは、今回の一人旅で彼の行動をなぞるべく、夜はネットカフェで過ごす決めていた。何故なら、これまでの話で彼の滞在率が一番高かったから。つまり

ところ、ただのミーハーなファン心理だけだ。

「……何でもいいけど、スパでもネカフェでもちゃんと安全に身体を休められるところを選びなよ、いいね？」

「うん、ありがとう」

明音は疲れたみたいな顔をしてから、最後にもう一度念を押した。わかってますって。

「あ、もうすぐ発車みたいだよ」

電光掲示板と時計とを交互に見比べて、明音が続けた。

「——それじゃ、行つてらっしゃい。三日間、気を引き締めつつ思いっきり楽しんできなよ」

「うん！」

キャリーケースを受け取って車両に乗り込むと、ホームに発車を知らせるチャイムが鳴り響いた。程なくして扉が閉まる。

「行ってくるね」

窓越しに見える明音の笑顔に呼びかけると、一人旅への期待と不安、それにわたし自身を乗せた新幹線は静かに動き出した。

加速するにつれよたよたとふらついてしまう足取りで、六号車へと続く扉を開ける。

1のD席は車両先頭の通路側。すぐ目の前だった。

明音にどんな席が良いかと訊ねられたとき、出来れば空間が広めのほうがいいと告げた。

ゆったりと過ごしたいのもそうだけど、背が低く力もあまりないわたしは、網棚に荷物を置くことが難しい。大荷物になるだろうから、席付近で荷物を置くスペースを確保したいと思っていたのだ。キャリーケースを壁に沿わせて置くと、肩にかけていたトートバッグを膝の上に下ろす。

……ほっ。落ちついた。

大きく息を吐いたあと、ふと隣を見遣る。

1のE席。窓際のその席は空いているようだった。

この新幹線は福岡の博多が終点みたいだから、途中から乗ってくるのかもしれない。ならばそれまで、ちよつとバッグを置かせてもらおう。

膝の上のバッグを隣の席に下ろすと、車掌さんのアナウンスが流れた。

停車駅への到着時刻の案内。京都へは二時間半程度かかるそうだ。

今が十二時半だから、京都へ着くのは十五時ごろ。

十五時には京都にいるんだ——それもたったひとりで降り立つのだと思うと、最高にドキドキな気分だった。

わたしは更に気分をアゲるために、隣に置いたトートバッグからあの漫画を取り出した。

そう、ハマりにハマっている『とら×ろま』の第十二巻——これは、先週発売されたばかりの最新巻だ。もちろん発売当日に手に入れたけれど、今回の旅まで取っておこうと、読みたい気持ちを抑えていたりして。

スペシャルな時間にスペシャルな本を読めるって、何て幸せなんだろう。

表紙を見ているだけでニヤニヤが止まらない。どアップで正面を見据えている詩文も「早く読めよ」と囁いてくれているみたいだ——とか興奮しつつ、満を持して表紙を捲る。

前巻は、詩文がそれまでいた静岡から大阪に拠点を変え、ミナミで一番のたこやき職人になると言い出したところで終わってしまった。連載している雑誌ではそろそろクライマックスだっていうし、このあと一体どうなっちゃうんだろう。

行き先は京都じゃなくて大阪っていうのもアリだったかなあ。行列の出来る屋台のたこやきを食べながら、詩文似のクールな人を探すっていうのも面白かったかも——なんて妄想し、気になる続きを読み進めていると、新幹線が停車した。品川についたようだ。

傍の扉から、わたしと同じように西を目指す乗客が次から次へと流れ込んでくる。すると、

「すみません、前、いいですか」

男性の声に呼びかけられ、ぱつと顔を上げた。

そこに立っていたのは、長身で整った顔立ちのお兄さん。

サラサラと触り心地のよさそうな黒髪は少し長めだけど清潔感は損なわれていない。スーツ姿の彼は脇にパソコンが入っているような大きめのバッグを抱えている。ビジネスマンなのだろうか。

「あの、すみません。前、いいですか」

男性——しかも、いかにも異性として意識してしまうような人に声をかけられたのは初めてで、固まってしまったわたし。聞こえなかったと解釈されたようで、彼は同じことを再度繰り返した。

『前、いいですか』

字面だけがわたしの頭の中をぐるぐる回っていた。五、六周目でやっと言葉の意味を考える余裕ができる。

わたしの前を通る——つまり、このイケメンさんはわたしの隣の……1のE席ってこと？

「……は、はいっ、すみません」

理解するや否や、読みかけの漫画を閉じてトートバッグの中に突っ込み、彼が通りやすいように席を立つ。

「っ、あ、ごめんなさい、これ邪魔ですよっ」

漫画を入れたバッグを隣の席に置きっ放しだったと、立ってしまったてから気がついた。

手を伸ばしてそれを引き寄せると、「今度こそどうぞ」と通路側に身体を避ける。

「わわっ」

その瞬間、ドンと何かに弾かれて前のめりになる。イケメンさんの後ろに続いていた大柄のおじさんにぶつかったのだ。

「ひっ……す、すみませんっ」

「失礼」

身体が大きいだけでなく、強面な感じだったから、怒られるんじゃないかとヒヤヒヤしたけれど、その人は短く断り、すり抜けて行った。

「ごめんね、大丈夫？」

「は、はい」

入れ替わりに窓際へと移動したイケメンさんが、すまなそうにいたわってくれる。頷くと、彼はホツとした様子で席に座った。

うう……恥ずかしい。明音に話したら、「またそんなボートとして！」って言われちゃうんだろうな。外のホームで発車サインのチャイムが鳴り、新幹線が再び動き出す。イケメンさんのやりとりで過剰な活動が続ける心臓を鎮めるため、手にしていたバッグを通路側の床に置いてから読書を再開することにした。

ああびつくりした。いち早く大好きな『とら×ろま』の世界に戻りたい——そう思いつつ、隣にやってきたイケメンさんが妙に気にかかり、視界の端で動きを追った。

イケメンさんはレザー製のバッグ——こういうの、ブリーフケースっていうんだっけ——からA4くらいのノートパソコンとACアダプタを取り出すと、慣れた手つきで奥の壁際にあるコンセントに繋いだ。机を引き出し、その上でひたすらタイプを始めた。

カタカタ。

カタカタ、カタカタカタカタ。

キーを叩く音に耳を奪われる。お仕事でもしているのだろうか。だとしたら何のお仕事だろう。スーツだから会社にお勤めしているんだよね、きっと。

とか推測を立てていると、漫画の内容が頭に入ってこない。イケメンさんの動作にばかり気がいつちやって……ずっと読みたかった漫画なのに、全然集中できないよー！

『旅は出会いって言うでしょ。たとえ短い期間だとしても場所や環境が変われば、清花がいいと思

うような男の人と出会うチャンスがあるかもね』

前期試験の終わり。明音に家出のことを相談したとき、最初は否定的だった彼女がそう言うって今回の旅行を勧めてくれた。

旅は出会い——わたしは景色を見るふりをして、キータイプを続けるイケメンさんを見遣った。あまりじつと見るとアヤしいだろうから、横顔をほんの一瞬だけ。ちらり。

……カッコいい人だなあ。

真剣にディスプレイを見つめる二重の瞳は切れ長なためか涼やかで、しっかりと跳ね上がった眉との距離が近い。加えて鼻筋が通っていて、唇は下の方にだけやや厚みがあり、バランスがいい。

綺麗なお顔をしているっていうのは第一印象でわかりきっていたんだけど、わたしはその彼の顔にどこか覚えがあるように思えてならなかった。

男の人の知り合いなんていないのに……何故なんだろう？

引っかかりを感じつつまたちらりと見ると、イケメンさんは疲れたのか深く息を吐きながら首を回す仕草をする。そうそう、目を酷使すると肩が凝るんですね。わかります。

脳内で一方通行な会話を交わすと、彼がふっとこちらを見たような気がした。

わわ、調子に乗ってごめんなさい。盗み見ていたことを悟られまいと、手元の漫画に意識を向ける。

……あれっ？

思わず、直接イケメンさんを見て見比べてしまいそうだった。

長めの黒髪。切れ長のクールな瞳。眉と目との距離の短さ。高い鼻に形のいい唇——そっか、誰

かに似てると思ったら、『とら×ろま』の詩文に似てるんだ！

すごい。まさかこんなに早く、こんなに近くで——自分の理想の男性に出会ってしまうなんて！
飛び上がりたくらいの感動を覚えるのと同時に、はたと気がつく。

こういうときって、どうしたらいいの？

素敵な人と巡り合えるチャンスがあればなーとは思ってたけど、出会ったあと、具体的にどうやってお近づきになればいいんだろうか。

ううん。お近づきに、なんてところまで欲張らないから、せめて京都で降りるまでの間に、今度はちゃんと言葉を交わしてみたい。

隣の席だし、わたしのほうから声をかける、とか？

思いついておきながら、わたしはすぐに「無理」とその案を打ち消した。

これだけのイケメンさんだもん。畏れ多くて、用事もないのに声をかける勇氣なんてない。

さっきは、たまたま話をしなければいけない状況だったから頑張れたけど……客観的に見てもだいぶテンパっていたし、上手く会話できる気がしない。

醜態を晒して「変なヤツだ」って思われるのは嫌だなあ。

……だとしたら、ここは残念だけど大人しくしておくべきなんだろう。うん、それがいい。

わたしは彼への興味を断ち切るべく、目が悪くなりそうなほど本を顔に近づけて、文字通り漫画の世界に没頭しようと努めた。

その甲斐あってか、視界いっぱいには繰り広げられる物語に、わたしはすぐに夢中になった。

詩文は、蛸の動きが生理的に受け付けないという理由で早々にたこやき職人を辞め、今度は四国の香川に飛んだ。そこで讃岐うどんの庶民的な味に心を奪われ、手打ちうどん屋さんと働くことを決意したらしい。

相変わらずダイナミックな生き方。わたしもこんな風に自由気ままに生きてみたい——と詩文に改めて尊敬の念を抱いたところで、左肩に何かコツンと触れる感触がした。

「……？」

左肩に接しているのはE席側、つまり例のイケメンさんが座っている側。

何気なく視線を送ってみると——なんと、イケメンさんがわたしの肩に凭れて眠っているじゃないですか！

それも、気持ちよさそうに穏やかな寝息まで立てて。

さっきから疲れてそうな雰囲気は感じていたから、仕事が忙しい人なのかもしれない。そういえば『とら×ろま』の詩文も、特急列車の中で執筆するときは「列車の揺れが心地よくてついつい舟を漕いでしまう」みたいに語っていたことがあった。

——いやいや、そんなことよりも今の状況！

彼の頭が触れる左肩を中心にカッと体温が上昇し、「ここだけ赤道直下？」と錯覚するくらいに身体全体が汗ばむのがわかった。

ど、ど、ど、どうしよう……!?

男の人と身体が触れるなんて、満員電車に乗ったときくらいなものだ。さしたる事情もないのに、